

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第 129 号(通巻第 189 号) 2014 年 7 月 17 日発行 発行人: 清水武志朗
編集人: 井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山
3-9 東永山複合施設 301(事務局員は常駐していません)
e-mail qqh43fdd@train.ocn.ne.jp
URL ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

「森は海の恋人」植樹祭に参加して



開会式であいさつする畠山さん

「森は海の恋人」の提唱者である畠山重篤さんは平成 24 年 2 月、「森づくりのノーベル賞」ともいわれる国連森林フォーラムの「フォレストヒーローズ」にアジア圏からただひとり受賞した。当時、畠山さんは「漁師の自分が森の賞を受けるなんておかしなものだよ」と苦笑していた。

だが、岩手県気仙沼市唐桑でカキ養殖を営む畠山さんら漁民たちは、平成元年から「牡蠣の森を慕う会」を組織して養殖場の湾に流れ込む水路の上流にある室根山(一関市)で樹木の植林を行い始めた。だから今年で植樹も 26 年目となり、最初に植樹した木々は成長して大地を潤し、海をも豊かにしていくようになってきている。

室根の森から流れ出す植物プランクトンをたっぷり含んだ水は、大川を流れて気仙沼湾に注ぎ、海の生物たちを豊かに育てている。「森～川～海」とつながる壮大な生態系の保全に対する取り組みなのだ。

畠山氏の最近の活動として、ロシア・シベリアのツンドラ地帯に関するつぎのような報告が行われた。

ツンドラには絶滅危惧種となる「シベリアンタイガー」が生息しており、シベリアの広大な森のなかにおいても危機に瀕している模様で、それを守るためには餌となる「イノシシ」を増やす必要がある。で、そのためにはチョウセンゴヨウマツの松の実(松ボックリ)が少なくなっているの、100 年～200 年の大きなスパンでマツを植え付け、どちらも絶滅しないようシベリアで植林活動に着手し始めたのだそうだ。

毎年、6 月の第一日曜日(今年は 6 月 1 日)を植樹祭の日としており、今年も「広葉樹の森づくり」を目指して各地から参加した 1000 人もの人たちが、ミズナラの、コナラ、カツラ、ミズキ、トチ、ブナ、オオヤマザクラ、ウワミズザクラ、サワグルミ、ケヤキ、クリ、ケンポナシ、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハルニレ、エゴノキ、ヤチダモ、チドリノキ、イヌエンジュ、ヤマボウシ、アカシデ、ハクウンボク、ノリウツギ



などを 50 アールの敷地に 1500 本もの植樹を行った。2011 年 3 月の東日本大震災では沿岸地域が壊滅的な被害を受け、そのつめ跡はまだ多々残っている。住宅地を造成するために海に近い山を削った大量の土砂が必要となるため、被災地を大型ダンプが行き来している。と同時に、山を削るにはそこに生えている樹木を伐採しなければつぎへの行程に進めず、大量の原木が山積みになっていた。

「自然の力」の前には「人間はかなわない」ということを目の当たりにして実感させられた。それと同時に、被災されたたくさんの方々の無念さが心に残り、5 年ぶりの岩手への旅はあまりにも感慨深いものがあった。(清水武志朗記)

1 日は雨にたたられた せいせき朝顔市

第 32 回ふるさと多摩夏まつり、せいせき朝顔市は 7 月 5 日(土)～6 日(日)に開かれた。だが、5 日はあいにくの雨模様。並べられた朝顔たちにとっては、いいおしめりになったかもしれないが、しとしと降る雨にお客の出足も途絶えがち。



とはいえ、関戸公民館では朝顔市とのコラボ企画による、あさがお寄席(8 F 大会議室)、おもちゃ病院(7 F 市民ロビー)、生け花の展示(ホワイエ)などが行われ、多摩センターのパルテノン多摩でもストリートオルガンとオルゴールの実演、演奏体験などが行われていた。

翌 6 日は対照的に快晴となり、気温も上昇。ようやくお客さんがひっきりなしに訪れるようになった。

地元農業団体による野菜販売コーナーでは、枝豆(茶豆)、人参、大根、玉ねぎなど新鮮な地元産野菜の販売で、お客を引きつけていた。本命の朝顔の鉢もつぎつぎに買われていく。また、当市と提携関係にある長野県富士見町のアンテナショップ・ポンテも出店し、富士見町周辺の産品を大きな声がけで販売していた。



市内の生鮮野菜の販売所

一ノ宮用水の水田で田植え終わる

4 月 26 日に水路改修後の生き物調査が行われた一ノ宮用水を利用した水田(一ノ宮 1 丁目、真明寺北側)では、すでに田に水が引き入れられて田植えも終え、これから稲の生長が始まる緑の木杭護岸の向こうに濃い緑がまぶしい時期を迎えていた。早くも水田のなかにドジョウや小魚などが生息しているのか、コサギも数羽飛来して水路でついばんでいるシーンも見られる。



4 月の調査時点ではカラカラに乾ききった田だったが、やはり水田というものはこういう景色でなければならない、ということ改めて納得させてくれる風景に変わっていた。

→ 4 月の水路調査時の乾田



一ノ宮用水改修後の水生生物の調査報告(中)

3. 調査結果と考察 (2) 水生生物



1-2 になる人工橋の部分の個体が多く、水路で越冬したと考えられる。また、調査中に踏んでしまったと思われるドジョウをやむなくエタノールで固定し、開腹したところ抱卵が認められた。

ドジョウやフナ属、タモロコは、多摩地域の農業水路では移入可能な水田周辺に局所的に分布することがわかっている(西田・千賀,2004)。多摩地域の水田地帯は未改修の用排兼用水路であるため、ドジョウなどの魚類が農業水路から水田へと移入して繁殖することが可能である(皆川ら,2006)。一ノ宮用水でも同様に水田とのつながりは良好であることから、灌漑期に魚類が水田で繁殖する可能性がある。

区間別にみると、過去に改修されている区間 1-1、1-4 に比べて、改修された区間 1-3 では採集された生き物が



少なかった。ドジョウでは 1-3 のみで採集されなかった。1-3 には改修後、礫が敷き詰められており、ドジョウが潜れるような泥の堆積はほとんどなかったため、1 個体も採集されなかつ

た。準絶滅危惧種のカエルだと考えられる。

表 2 採集された水生生物と採集個体数

	種類名	採集個体数				備考
		1-1	1-2	1-3	1-4	
1	ドジョウ	9	5		8	注 1
2	トウキョウダルマガエル			1		注 2
3	カワリヌマエビ属エビ類	8			34	注 3
4	アメリカザリガニ	4	2	1	12	
5	シオカラトンボのヤゴ	5	1	1	24	
6	カワニナ類				2	
7	シジミ類				8	
8	ガムシ類				1	

※注 1：抱卵個体含む 注 2：幼体、畦畔で捕獲、国の準絶滅危惧種 注 3：外来種

(3) 環境条件

水温は 19.0℃、水質は pH：7.9、DO：7.3mg/L、EC：0.25mS/cm であり、前回に比べて DO が低く、EC がやや高いが中流域の水質の範囲であった。

1-1、3、4 では、水深が 10~25 cm、流速が 10~30 cm/s の範囲であった。一方、1-2 ではいずれの測点でも

8 種類の生物が採集された 水深が約 45 cm、流速が 5 cm/s 以下であった。



改修後、間もない 1-2、3 では堆積深がいずれの測点でも 1 cm に満たず、特に 1-3

では堆積のない測点が多かった。改修済みである 1-1、4 では 0~6 cm の範囲であった。



目視調査では、泥・落葉落枝が河床に占める割合は 1-1、4 では 70% ドジョウの体長を測定以上であるのに対して、1-2 では 30% 程度、1-3 では 10% に満たなかった。1-4 では沈水植物であるコカナダモ(要注意外来生物)の生育が 5% 程度認められた。抽水植物については植栽されたキショウブ(要注意外来生物)が河床の 20% 程度に生育していたが、他の区間ではほとんど認められなかった。

1-3 において改修前(2013 年 11 月 16 日)と改修後(今回)調査の水深・流速を比較してみると、改修後に流速の小さい(10 cm/s 以下)測点が減少していた。抽水植物等がなくなったことにより流れが均一になった。また、護岸がコンクリートになったため粗度係数(流水の抵抗量を示した数値)が低くなったことなどにより、低流速帯が減少したと考えられる。→1-3 の護岸のコンクリート化



4. まとめと課題

(1) 改修された区間の工法について

1) 護岸 未改修の農業水路には岸際にヨシなどのイネ科植物やミゾソバなどの抽水・湿性植物が生育し、それらが魚類をはじめとする生き物の生育場となっている(藤咲,1999)。これらは農家の維持管理によって適度に生育する状況にあった。

1-3 は、左岸が木杭護岸に改修され、また、改修直後でありながら、木杭の間に植物の生育がみられた。今後、植物の生育が進めば、魚類等が身を潜める場となる可能性がある。また、植物が水路内へ侵入してくれば、その部分は流速が緩やかになるため、泥を堆積させることにより寄洲が形成されて、改修前にあったような植物帯が形成される可能性がある。水路改修後に、このような寄洲および植生帯が回復した区間では、改修前の魚類相に回復したことが報告されている(西田ら,2011)。なお、植生帯の回復は植栽で行うのではなく、在来植物の生育を待つことが望ましい。(次号につづく)

ど根性キノコ 台風に倒さる

市内聖ヶ丘のひじり館前の歩道際に、3 日間ほどで急成長したキノコがあった。なんと、かさの部分の直径が 23cm、その厚さ 6cm、くき部分の長さも 13cm と“ど根性”2 株のジャンボ級が成長と“ジャンボ”と一緒に立ったようなキノコだった。



しかし、もともと根がなく、土の上にちょこんと立って成長したようなものだから、7 月 11 日未明の台風 8 号接近による強風でバツリ。それでももうひと株のキノコはしっかりと立っていた。秤(はスケールとの大きさを比較)がないので重さは量れなかったが、どなたかお腹のなかに始末していただけますか? 案内しますよ。

